

- 1 早春やセスナ古墳をかすめ飛ぶ
- 2 涅槃日の浜に転がる冷蔵庫
- 3 啓蟄の喉元過ぐる花麩かな
- 4 抽斗にモデルガンあり雁帰る
- 5 硝子片接ぐセメダイン蝶生るる
- 6 黄梅や人工池に亀浮かぶ
- 7 エンボスの紙の手触り弥生尽
- 8 春光を韓国海苔に透かしをり
- 9 朝桜ダムの放水はじまれり
- 10 二胡の音につつまれ浅蜷うごめける
- 11 春愁をまるまるたべてしまひけり
- 12 夢違へ腕にほぐるる桜漬
- 13 春月や鉄の扉を開けにゆく
- 14 浜大根マンドラゴラ説急浮上
- 15 アラームの鳴る春昼の玩具箱
- 16 転げつつころげつつ逃げ春の豚
- 17 水管橋ペンキつやめく遅日かな
- 18 抜けたての乳歯とならべ桜貝
- 19 犬の眼の乾く鋳泉花ぐもり
- 20 ゲラの束抱へ柳絮の中を過ぐ
- 21 潮風に錆びたる遊具おそざくら
- 22 私を置き去りにして蜂より逃げ
- 23 春爛漫ビニールくはへ猫走る
- 24 白い塔ゆびさして夏はじまれり
- 25 はつ夏のフェリーの後を海豚追ふ
- 26 アカシアの夜ラム肉を炙りゐる
- 27 傘雨忌やユツケのうへのなまたまご
- 28 煎餅を投げ鹿の子に近づかず
- 29 でで虫や四号線に朝来る
- 30 梅雨冷えの海驢(あしか)の首を思ふべし
- 31 遁走の鰐の吐きたる虹濃かり
- 32 青芒ことば凶器となりにけり
- 33 蝙蝠の脳震盪を二度もみる
- 34 黴の香の古書店奥の鳥籠よ
- 35 海猫やコンビナートの動きだす
- 36 バイパスに逃げるにはとり半夏生
- 37 七月の蒼き獣が目を覚ます
- 38 タ立やコールタールの匂ふ壁
- 39 トニツクのつむじに沁むる我鬼忌かな
- 40 向日葵や極左の赤いペンキ文字
- 41 行きゆきて小さき祭に出会ひけり
- 42 打水をよけて昼間の顔を捨つ
- 43 蛇殺め来て静かなるぼんのくぼ
- 44 海賊の出没虹の彼方かな
- 45 たましひも投売り夏の夜の市場
- 46 遠花火ハツカ油を湯にたらす
- 47 いつか見た煙突のある夕焼かな
- 48 法師蟬ギョーを転調したりけり
- 49 肉食の獣のごとき昼寝かな
- 50 石臼につぶすスパイス早星

- 51 リネン室にシート山積み夏をはる
 52 晩夏光わたしのなかの野蛮人
 53 星まつり水に顔浸け眼を洗ふ
 54 八月の風呂場に犬と懺悔せよ
 55 新涼が物干し竿に干されゐる
 56 立秋の洗顔料にバニラの香
 57 蜉蝣のからだなきままうまれたる
 58 青北風や高架の下の干蒲団
 59 工場の白煙夜のいわし雲
 60 流刑史の赤き背表紙雁渡る
 61 桃一個ナイフ一本冷やしおく
 62 虫時雨泡立つ闇のひとところ
 63 ハミングに果つるゴスペル秋の虹
 64 夕顔の実のまんなかのほのあかり
 65 月明に大胸筋の張りにけり
 66 金木犀火花こぼるる架橋かな
 67 策略のごとくに秋の晴れにけり
 68 熟れながらけふの暮れゆく榎櫃かな
 69 模造刀拭ふタオルや秋の蝶
 70 露草や鍵をかけたる箱ひとつ
 71 草ひばり絹いちまいの夜がある
 72 天体のひとつは発酵する朱欒
 73 紅葉且つ散るカッターの刃を替ふる
 74 橙やサイロは青き闇のなか
 75 一弦の切れて林檎の匂ひけり
- 76 秋風やしびれ葉のしむところ
 77 小鳥来るもの食うといふ侘しさに
 78 ココナツの箸の軽さや十三夜
 79 黄楽期カリヨンの音ひとつ欠け
 80 ダンプカー行く芭蕉忌の砂けむり
 81 木枯や地に円柱を深く挿し
 82 オリオンを斜めに構へ犬ゆまる
 83 鉄塔のひとつ増えたる寒さかな
 84 もの言はぬ巨大高炉や冬かもめ
 85 開戦日鍋にカラメル沸騰す
 86 メキシコに犬の寝返る冬至かな
 87 渋滞に戦車も混じるクリスマス
 88 共犯者のごとくに牡蠣を啜るなり
 89 枯芝に鉄屑となるオブジェかな
 90 舶来のインクに咽ぶ雪もよひ
 91 アスファルト寒星集め濡れにけり
 92 冬薔薇ぶつきらぼうな空がある
 93 ビーカーの中の対流雪降り
 94 廃船の中に人ゐる歳の暮
 95 液化して真冬の眠るガスタンク
 96 遠雪嶺手羽先の先叩き切る
 97 淑気かな廻廊奥に大鏡
 98 大寒や黒きレザーに鋏を打つ
 99 耳を搔く冬満月に耳を向け
 100 風花や地球を包む玻璃の玉